

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：32690
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2017～2022
 課題番号：17K04884
 研究課題名(和文) 高校生のアントレプレナーシップ育成を目指した教育プログラムに関する国際比較研究

研究課題名(英文) International Comparative Study on Educational Programs Aimed at Developing Entrepreneurship in High School Students

研究代表者
 宮崎 猛 (Takeshi, Miyazaki)

創価大学・教職研究科・教授

研究者番号：50440227

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、各国で実践されている高校生による社会貢献・SDGsプロジェクトの教育効果を比較検証し、その成果を日本の教育実践に活用しようとするものである。コロナウィルスの蔓延状況により海外に対する調査研究が滞ることになった。このため研究は国内のプロジェクトにフォーカスすることになった。成果として第一に社会貢献プロジェクトに主体的に関わることで社会人基礎力に関連した能力を身につけたとの認識がなされた。それは「社会貢献への関心」「発言力」(高校生、大学生)、「協調性」(大学生)、「責任感」「リーダーシップ」「問題解決能力」(高校生)で確認することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、各国で実践されている高校生による社会貢献・SDGsプロジェクトの教育効果を比較検証し、その成果を日本の教育実践に活用しようとするものである。コロナウィルスの蔓延状況により海外に対する調査研究が滞ることになった。このため研究は国内の高校生による社会貢献・SDGsプロジェクトにフォーカスすることになった。成果として第一に社会貢献プロジェクトに主体的に関わることで社会人基礎力に関連した能力を身につけたとの認識がなされた。それは「社会貢献への関心」「発言力」(高校生、大学生)、「協調性」(大学生)、「責任感」「リーダーシップ」「問題解決能力」(高校生)で確認することができた。

研究成果の概要(英文)：This study aims to compare and verify the educational effects of social contribution and SDGs projects by high school students practiced in various countries, and to apply the results to educational practice in Japan. Due to the spread of the coronavirus, overseas research has been delayed. Therefore, research was focused on domestic projects. The first outcome was the recognition that the students had acquired abilities related to basic skills for working adults through their proactive involvement in social contribution projects. This was confirmed by "interest in social contribution" and "ability to speak up" (high school and university students), "cooperativeness" (university students), and "sense of responsibility," "leadership," and "problem-solving skills" (high school students).

研究分野：教科教育学

キーワード：アントレプレナー サービス・ラーニング 高大連携 探究活動 高校生 SDGs 社会貢献プロジェクト

1. 研究開始当初の背景

本研究は「高校生と大学生の協働による起業家教育プログラムの作成と支援組織の構築」(代表、基盤研究 C、2013 年度～2016 年度)の研究成果を継承発展させるために行われるものであった。プログラムは教育施策の重点項目とされているキャリア教育を推進し具現化を図ること(アントレプレナーシップ教育)、近年の大学教育改革で求められている学修と社会との連携を図ること(サービス・ラーニング)、それらを通して高校教育と高等教育を有機的かつ円滑に接続すること(高大連携)を目的として開発されたものである。開発したプログラムは IARSLCE(サービス・ラーニング国際学会)において、2 年にわたって発表した(2014 年・ニューオリンズ、2015 年・ボストン)。米国においても類似したプログラムが展開されており、研究者からの注目を集めた。本研究で国際比較を行いたいと考えた着想の経緯はここにある。

2. 研究の目的

本研究はこのプログラムに参加した高校生、大学生がどのように変容したのかについての効果測定を日本のみならず、諸外国の参加者も含めて行い、その意義と効果を、各国の教育施策等との関連を明らかにしつつ解明しようとするものである。

それらを分析することによって、同種のプログラムの教育効果ならびに参加者の学習効果が明らかになり、日本および参加諸国の同プログラムの改善と発展に寄与するとともに、アントレプレナーシップ教育ならびにサービス・ラーニングの教育効果の一端が解明されることになる。また、国際比較を行うことで、日本の課題解決型学習のあり方、その効果や方法について、多角的な検証に基づく具体例や情報が提供されることになる。

3. 研究の方法

各国で実践されている高校生による社会貢献・SDGs プロジェクトについて、日本ならびに海外数カ国の高校生を対象とした調査を行い、社会貢献プロジェクトがもたらす教育効果を比較検証し、その成果を日本の教育実践に活用しようとするものである。これまで調査のための質問内容の策定、倫理委員会の承認、国内高校への調査依頼・承認、国内高校生・大学生への調査を行った。国外についても調査内諾を終えたものの、コロナウィルスの蔓延状況により海外に対する調査研究が滞ることになった。このため研究は国内の高校生による社会貢献・SDGs プロジェクトにフォーカスすることになった。

検証方法としては質問紙法を用いた。高大連携による社会貢献・SDGs プロジェクトである SAGE JAPAN の参加者に対して、複数の質問項目による自己評価を行い、分析して SAGE JAPAN の活動の教育的効果を判断するというものである。自己評価における質問項目は、評価規準を決めてそれをもとに作られた。規準と質問項目の作成については、経済産業省が提唱する社会人基礎力(経済産業省、2018)における諸要素を参照しつつ、実践支援者である大学生サポーターに聞き取りを行って試作するという方法によった。社会人基礎力を参照した理由は、市民としての基礎的資質や現代社会に求められる問題解決の諸能力を提示しているとして産業界、教育界等各方面から幅広く参照されており、その内容も社会の問題の改善を図っていくこととするアントレプレナーシップ教育ならびにサービス・ラーニングと共通するところがあると判断されたからである。なお、規準の作成においては、高等学校学習指導要領(平成 30 年)における評価の 3 観点「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」も合わせて参照し、情意面と能力面の二つに分けた。情意面は、3 観点のうち「主体的に学習に取り組む態度」に相当するもので、能力面は「知識・技能」「思考・判断・表現」に相当するものである。本研究では情意にかかわる規準をメンタル面、能力にかかわる規準をスキル面とよぶ。メンタル面は、「1 社会貢献への関心」「2 チャレンジ精神」「3 向上心」「4 責任感」「5 社会問題の関心」の 5 つの規準、スキル面は、「6 リーダーシップ」「7 発言力」「8 創造力」「9 協調性」「10 問題解決能力」の 5 つの規準とし、計 10 規準について調査を行うことにした。各規準には 2 つの質問項目を入れて回答の平滑化をはかった。また、質問項目の他に、数値ではとらえられない参加者の思いや体験を通じた変容の有無などを調べるために、活動前および活動後に自由記述による質問を実施した。

4. 研究成果

本研究で明らかになった事項を総合的にとらえると、第一に社会貢献プロジェクトに主体的かつ積極的に関わることで社会人基礎力に関連した能力を身につけたとの自己認識がなされたということである。それは「社会貢献への関心」「発言力」(高校生、大学生)「協調性」(大学生)「責任感」「リーダーシップ」「問題解決能力」(高校生)で確認することができた。第二は、高校生と大学生で異なった結果となった規準があったことである。具体的には、「責任感」「リーダーシップ」は、高校生では活動前後の有意な向上がみられたものの、大学生では向上はみられたが有意差までは出ないという結果になった。要因は、プロジェクトにおける高校生、大学生の役割が異なり、それぞれの役割を果たす過程で、それに必要な能力の必要性を強く感得したり、不足を内省したものと考えられた。普段の学校、大学での生活や学習には求められない場がこの活動で提供されたものともいえよう。第三に、第一と第二に関連して、チームでの活動、現実社

会に影響を与えるプロジェクト、異校種間(高校生と大学生)の協働の三つが学びの重要な要素になっていたということである。

最後に本研究の課題と限界について述べる。本研究では量的分析ではわからない活動における事象の状況を知るために質的分析を用いた。質的なデータ(特に高校生)には様々な学びの姿が示されていたが本研究ではそれを取り上げることはできなかった。また、本研究での調査は自己認識を調査したものであることから実際に身に付いたかどうかを検証するものではない。本研究の限界は、一つの事例のなかで少ない標本数に基づいて行われたものであり、高校生や大学生のアントレプレナー教育の効果として一般化することはできないことである。

本研究は上述のような課題や限界があるものの、今日多様な形で奨励されているアントレプレナー教育や高大連携の実例を示したものである。本研究がその実践とともに今後の同種の教育や実践において参照されることを期待したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 宮崎 猛、桐山 信一	4. 巻 31
2. 論文標題 サービス・ラーニングとアントレプレナー教育を取り入れた高大連携プログラム 「SAGE JAPAN」における社会貢献プロジェクトの教育効果	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 創大教育研究	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 渡辺 秀貴、宮崎 猛、大野 滋生、白土 明夫、竹縄 光雄、古川 恵美子、根津 雅子	4. 巻 73
2. 論文標題 日本の教員の資質能力の向上と教育政策及び教育施策	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 創価大学教育学論集	6. 最初と最後の頁 87-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takeshi Miyazaki	4. 巻 Vol. 5
2. 論文標題 The Influence of Service-Learning on the Civic Attitudes and Skills of Japanese Teacher Education Candidates	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 International Journal of Research on Service Learning in Teacher Education	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 宮崎 猛	4. 巻 VOL.35 NO.2
2. 論文標題 日本と海外の思春期における社会奉仕活動 英国ナショナル・シティズン・サービス、米国サービス・ラーニングとの比較を中心に -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本思春期学会 思春期学	6. 最初と最後の頁 196-201
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Takeshi Miyazaki
2. 発表標題 Fostering Citizenship based on SDGs Project Practices Bridging University and High School Students
3. 学会等名 2021 NCSS IA Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮崎 猛
2. 発表標題 The Effectiveness of Entrepreneurship Education and Service-Learning in Secondary and Higher Education in Japan
3. 学会等名 NCSS (全米社会科協議会) IA (国際部門) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮崎 猛、高久 孝一他
2. 発表標題 高校生社会貢献プロジェクトを支援する大学生サポーターの育成 - SAGE JAPAN運営大学生による学習会に着目して -
3. 学会等名 創価大学教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮崎 猛
2. 発表標題 Trends in Asian Service-Learning Research
3. 学会等名 IARSLCE (INTERNATIONAL ASSOCIATION FOR RESEARCH ON SERVICE-LEARNING AND COMMUNITY ENGAGEMENT) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takeshi, MIYAZAKI
2. 発表標題 Development of Service-Learning in Japan:Throug analysis on 236 studies from 2010 to 2017
3. 学会等名 INTERNATIONAL ASSOCIATION FOR RESEARCH ON SERVICE-LEARNING AND COMMUNITY ENGAGEMENT (IARSLCE) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Takeshi Miyazaki
2. 発表標題 Social Participation among Japanese High School Students and its Impact on Society
3. 学会等名 The Annual Meeting of the International Assembly of the National Council for the Social Studies (NCSS) The International Assembly (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Takeshi Miyazaki他6名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 IGI Global	5. 総ページ数 29
3. 書名 International Beliefs and Practices That Characterize Teacher Effectiveness	

1. 著者名 宮崎 猛	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 15
3. 書名 「はじめて学ぶ 生徒指導とキャリア教育」長島明純編 『社会参加学習』	

1. 著者名 宮崎 猛	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ナツメ社	5. 総ページ数 224
3. 書名 主体的な学びで、学力を伸ばす! アクティブ・ラーニングの基本と授業のアイデア	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>SAGE JAPAN http://sagejapan.jp SAGE JAPAN http://sagejapan.jp SAGE JAPAN http://sagejapan.jp/</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	新田 都志子 (Nitta Toshiko) (30438866)	文京学院大学・経営学部・教授 (32413)	
研究分担者	馬渡 一浩 (Mawatari Kazuhiro) (60614493)	文京学院大学・経営学部・教授 (32413)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------